

2020年度 修士論文

ハーバート・リードの芸術教育論に関する研究

A Study on Art Education Theory of Herbert Read

松田 惇

(発達教育科学専攻 教育学領域)

1. 問題と目的

現代の教育において、芸術に注目が集まっている。例えば、OECDは芸術に着目し、それを教育に取り入れることを主張している。また、STEAM教育という言葉が登場し、理数科目を促進させるために芸術を加えることが述べられている。

このように、いわゆる副教科や周辺科目として扱われている芸術系科目が注目されることは歓迎されることである。しかし、例で挙げたOECDやSTEAM教育では、芸術の性質や機能が十分に吟味されているのだろうか、という疑問が生じる。また、芸術の性質や機能が教育においてどのような効果や意義があるのか、という点についても同様である。

このような現状に対し、本研究ではハーバート・リードの芸術教育論を取り上げる。彼の芸術教育論を読み解き、現代における芸術教育の捉え直しに対してどのような示唆を与えるのかを検討する。

2. 論文の構成

序章 研究の目的および先行研究について

第1章 リードの思想の概要

第1節 リードのアナキズム思想

第2節 リードの芸術論

第3節 リードと精神分析

第2章 リードの芸術教育論

第1節 リードの芸術教育論の概観

第2節 リードの思想における芸術教育論

第3章 リードの芸術教育論の現代への示唆

第1節 リードの思想の現代性

第2節 現代の教育への示唆

終章 研究のまとめと今後の課題

3. 論文の概要

序章 研究の目的と先行研究

本研究の目的は、現在の教育に対し、ハーバート・リード(Herbert Read、1893～1968)の芸術教育論がどのような示唆を与えるかを明らかにすることである。

リードは詩人や芸術批評家として知られており、詩論、芸術論、アナキズム論などを展開している。彼は様々な領域で思想を展開しており、その1つに芸術教育論がある。本研究では、これについて取り上げ考察をする。

彼の芸術教育論は『芸術による教育(Education through Art)』(Read 1958=2001)の中で主に展開される。彼の述べる芸術教育論では、図画工作や美術、音楽といった狭義の芸術系科目に留まらず、芸術や教育を広く捉え、芸術を基盤とした教育を進めるべきである、ということが主張されている。

このようなリードの芸術教育論に対する先行研究では、応用の可能性を見出すものと批判的に検討しているものに分かれる。応用の可能性を見出すものには、リードの芸術教育論は現代においてもなお価値があるとするものや、図画工作科や美術科において応用できるとするものがある。しかし、現代教育全般への応用は難しいとされているものが多い。また具体的にどのような視点で意義があるかについては言及されていない。加えて、現代社会あるいは現代の教育がどのような特徴をもち、なぜ応用が難しいか、という点も言及されていない。

批判的に検討するものでは、現代の教育においてリードの芸術教育論をそのまま応用することが難しい、という結論の一致が見られる。それは、リードの芸術教育論が反主知主義的な側面をもつことや、美学理論のひとつとして見なすことが妥当である、とされるためである。

これらのような先行研究において、肯定的な

立場からも批判的な立場からも教育における応用は難しいとされる。また、応用の可能性を見出すものに関しても、図画工作科などの限られた教科への応用であり、リードの意図していた芸術教育ではないといえる。

一方、現在の動向として芸術教育が注目されていることも事実である。例えば、OECDは『アートの教育学 (Art for Art's Sake? : The Impact of Arts Education)』(Winner et. al. 2013=2016)の中で、芸術教育が様々なスキルの習得に寄与することを、多様な芸術の分野から検討している。その中で、OECDは「転移」という視点から芸術教育の効果を検討する。また、STEAM教育という言葉が登場し、これまでSTEM教育と呼称されていた、科学(Science)、技術(Technology)、工学(Engineering)、数学(Mathematics)などの理数科目を促進させるために芸術(Arts)を導入することが提唱されている(胸組 2019:59-60)。しかし、これらが芸術教育に注目するにあたり、芸術の性質や機能については細かく検討されていない。

つまり、現代の教育において芸術を導入することが期待されているが、その性質や機能を明らかにし、どのような効果をもたらすのか、という点までは検討されていないといえる。このような現状に対し、リードの芸術教育論は捉え直しの示唆を与えると考える。

第1章 リードの思想の概要

先述したように、リードの思想は多岐にわたっている。中でも、「アナキズム論」「芸術論」「精神分析」が特に重要である。また、これらの思想は芸術教育論とも深く関連しているといえる。この3つの思想について、以下で概観する。

まず、リードのアナキズム思想では、どのような側面においても「相互扶助」と「個人の尊重」が主張される。リードは国家や権力の存在しない社会を理想としていた。それは決して無秩序ではなく、個人が尊重される相互関係の中で、秩序や規律が生み出されていく社会であるといえる。

芸術家の扱われ方に対する懸念や戦争への反対などからもアナキズム的な社会を理想としていたことが見える。また、リードの理想とする社会では、芸術家は既存の形式を破壊し、新しい形式を作り出すことのできる存在である。これは、新たな社会の形式を生み出すことにもつながっていく。

現代においてアナキズム思想やその社会は

非現実的である、といった捉えが一般的である。リードはアナキストを自称しており、その思想は国家や政府が存在しないという意味ではアナキズム思想であるといえる。しかし、リードのアナキズム思想の根底にあるものは、「相互扶助」と「個人の尊重」の2点であり、これらを目指した結果がアナキズム思想を発展させることになったと捉えることができる。

リードの芸術論では芸術をコミュニケーションのひとつとして捉えていたことが特徴である。そのコミュニケーションでは、主に芸術家の感情が伝達される。また、芸術や芸術家を広く捉えており、個人の感情に形を与える全ての人々を「芸術家」としていた。しかし、そこに道徳的あるいは政治的な価値が含まれると、価値が失われてしまうとしている。また、「美」の基準については非常に曖昧なものであるとする。これは、個々人や時代、場所によって様々な価値基準が存在しているためである。

リードにとって芸術のもつ意味は芸術家と社会をつなぐものである、といえる。アナキズム思想における芸術家の捉えからもわかるように、芸術家は社会とのつながりがなくては価値が見出されない。個人の内的なものを社会に影響を与える形にしていくことで、芸術家の属する社会や文化とのつながりを生み出すことができるのである。

リードは自身の芸術論を展開させるにあたり、心理学や精神分析を拠り所とすることで、それまでは未解決だった部分を解決させることができると考えていた。

無意識の領域ではフロイトの無意識論をもとに、個人の感情や性格を「イド」に相当させた。「自我」によって個人の感情が社会と軋轢を生まない芸術という形式で表出され、感情が芸術として表れるとき「超自我」によって道徳的あるいは宗教的な価値が含有される、という解釈を与えた。また、「個性」と「性格」という対立概念を提起することで、超自我を芸術作品に道徳的・宗教的な価値が含有させる役割から、自己の中に存在する葛藤を乗り越える役割へと捉え直しを行った。

精神分析と関わって、リードは類型論を展開させる。彼の類型論は、精神分析からユングのものを、芸術学からブローのものを取り上げながら展開される。子どもの描画から8つの類型を提示し、それらを通して子どもがもつ傾向を把握できるようになるとされる。

しかし、リードの類型論はあくまで、子どもの描画に着目し提示された類型論であるため、

慎重に扱う必要がある、といえる。彼の述べる芸術は描画に限ったものではなく、広く捉えられているため、子どもの他の表現については対応しきれない部分がある。また、ユング類型論とブロー類型論の間に明確な対応関係が見出せるか、あるいはその根拠はあるか、という点については疑問が残る部分である。このことを踏まえると、リードの類型論はあくまでも1つの指標として取り扱うことが妥当であるといえる。

第2章 リードの芸術教育論

第1章では、リードの思想における「アナキズム思想」「芸術論」「精神分析」について概観した。では、リードの芸術教育論ではどのようなことが述べられているのだろうか。

まず、リードの教育の目的は「個人の特性の発達・成長」、「個人と社会の結合」と捉えることができる。これらを並列して掲げているのは、個人の特性は孤立状態では価値が見出されないためである。

また、リードは子どもを芸術家として捉えており、彼らの表現する芸術は大人のものとは異なることを強調する。これを踏まえ、リードは具体的な方法として美的教育を主張する。これは能力などの習得、強化を目指したり、芸術家を育成したりするものではない。子どもたちに表現する媒体を教え、その表現を助けることが目的とされる。また、そこでの教師は子どもに強制しないことが必要になる。

これらのことを踏まえると、「個人の特性の発達・成長」を基盤とし、「個人と社会の結合」があると捉えることができる。芸術はコミュニケーションのひとつであり、それは子どもが表現できるように促されることで可能になるコミュニケーションである。そのため、社会とのつながりを形成するためには、その契機となるコミュニケーションの発達が必要であるといえる。教育の目的の両者を達成するために、「個人の特性の発達・成長」を基盤とした「個人と社会の結合」が存在していると捉えることができる。

では、このような芸術教育論と上述した3つの思想「アナキズム思想」「芸術論」「精神分析」はどのように関わるのだろうか。

リードの芸術教育論はアナキズム思想を基にした目的が掲げられ、道徳や規律についても同様のことがいえる。そして、その実現のために芸術論を根拠にした美的教育の必要性が説かれる。また、そこでは芸術の創作、鑑賞とも

に、人間形成や社会との結合に繋がっていること指摘されている。精神分析に関しては、自身の芸術論を補強するために精神分析の知見を援用したと考えられるため、教育論との直接的な関わりは薄いといえる。しかし、精神分析によって裏打ちされた芸術論がリードの芸術教育論の発展に関わっていたことは事実だろう。

リードの芸術教育論はそれまでに彼が培った様々な思想が反映され、関わり合って形成されたものである。彼の芸術教育論における目的は「個人の特性の発達・成長」と「個人と社会の結合」である。これらは一見矛盾しているようにも見えるが、これらの目的を整合的に並列させるためにこのような様々な思想が関わり合い、芸術教育論が展開されていると結論づけることが可能である。

第3章 リードの芸術教育論の現代への示唆

第3章では、現代の芸術教育に対し、リードの思想がどのような示唆を与えるかについて論じる。

まず、現代ではOECDの調査やSTEAM教育などの視点から、芸術教育は重視されていることが認められる。OECDは「転移」ということに着目し、芸術教育の重要性を認めている。芸術教育によって学力や様々なスキルを伸ばすことが有効であり、その目的は経済発展を目指したものである。またSTEM教育にArtsが加わったSTEAM教育はそれぞれの領域を統合するものとして登場した。その中で、Artsは解釈によって様々であり、芸術科目として捉えられるものやリベラルアーツとして広範なものとして捉えられることもある。

これらは芸術の捉え方は芸術以外の領域における知識や技能を習得させるために芸術の重要性が主張されているように捉えられる。OECDは経済発展を促すための学力やスキルに転移させるためであり、STEAM教育ではSTEM領域の統合を促すためのものである。

このような芸術の捉え方は、芸術そのものに価値を見出されているのではなく、そこから他の領域へ波及する効果について目が向けられ、重要性が説かれている側面がある。

一方、リードの芸術教育論においては、知識の習得の基盤にも芸術の機能が置かれている。知識の習得を含めて広く人間形成を目指し、芸術を基盤とした教育を進めることが主張されている。彼の教育論では、芸術のもつ価値やそれを通じた教育によって、全人的な人間形成が目指されている。

現代では芸術以外の領域における学力やスキルに対し影響を与えるため、芸術教育の重要性が主張されている。しかし、その性質や機能に関しては言及されておらず、従来の教育方法に芸術を加えることで達成されると考えられている。しかし、芸術そのものの価値を見出し、生かしていくことが芸術教育の役割である、ともいえる。リードの芸術教育論は芸術を基盤とする教育が主張される。これはあらゆる教育活動において芸術の創造的ないし想像的な機能が基礎となっていることをさす。

また、リードの芸術教育論は、相互扶助と個人の尊重を目的とした、全人的な人間形成が目指されているといえる。その根底にあるものはアナキズム思想である。また、その思想における相互扶助や個人の尊重は現代でも受け入れることが可能な要素であるといえる。リードは芸術におけるコミュニケーション性を見出した。また、アナキズム思想と関連させながら芸術のもつ破壊と創造の機能を教育や人間形成の中に見出した。

このような芸術や芸術教育に対する捉え方は、現代における芸術教育の捉えとは異なるものである。能力の獲得や他領域の統合というように、芸術以外の領域における手段として活用するのではなく、芸術そのものを基盤とし、子どもが生まれながらにもっているものを、教育を通して育てていくことが重要であるといえる。このように、芸術および芸術教育の捉え直しに対し、リードの芸術教育論は示唆を与えられると考えられる。

終章 研究のまとめと今後の課題

本研究では、リードの芸術教育論を読み解く中で、人間形成を目指したものであることが明らかとなった。これは芸術の機能や性質に依拠したものである。また、現代の教育においては芸術を導入することで、学力や能力が向上すると捉えられる。しかし、そこでは芸術の機能や性質は十分に考慮されているとはいえない。このような芸術教育や芸術を捉え直す際に、リードの芸術教育論は示唆を与えてくれる、ということをも本研究の成果とする。

また、本研究では、現代教育への示唆という観点から論述した。そのため、リードの思想に影響を与えたとされる思想家についての検討ができていない点が課題として挙げられる。リードは自伝の中で、自身が影響を受けた思想家として、ニーチェ、カント、プラトンなどを挙げている。そのほかにも、様々な領域の研究者、

思想家の名前が挙げられている。リードの思想を取り上げるにあたり、これらの思想家について深く掘り下げることはできなかった。

また、リードの生きた時代の芸術教育論や美学との比較や影響関係についても考察に至らなかった点も課題として残る。

以上のような、リードの思想に影響を与えた、思想家や研究者、諸領域の論説について比較および検討の余地が残されていることが本研究における課題であるといえる。

〈主要参考文献〉

- ・胸組虎胤 (2019) : 「STEM 教育と STEAM 教育 歴史、定義、学問分野統合」、『鳴門教育大学研究紀要』34 巻、58-72 頁。
- ・Read, Herbert (1958[1943]) : Education through Art. 3rd. edition. London (Faber and Faber) =宮脇理、岩崎清、直江俊雄訳『芸術による教育』フィルムアート社、2001 年。
- ・Read, Herbert (1963) : The Contrary Experience : Autobiographies. London (Faber and Faber) =北條文緒訳『ハーバート・リード自伝 対蹠的な経験』法政大学出版局、1970 年。
- ・Read, Herbert (1971) : Anarchy and Order : Essays in Politics. Boston (Beacon Press) =大沢正訳『アナキズムの哲学』法政大学出版局、1968 年。
- ・Sousa, David A., Pilecki, Tom (2013) : From STEM to STEAM : Using Brain-compatible Strategies to Integrate the Arts. Thousand Oaks, California. (Corwin, a SAGE company) =胸組虎胤訳『AI 時代を生きる子どものための STEAM 教育』幻冬社、2017 年。
- ・Winner, Ellen/Goldstein, Thalia R./Vincent-Lancrin, Stéphan (2013) : Art for Art's sake? : The Impact of Arts Education. Paris. (OECD) =OECD 教育研究革新センター編、篠原康正、篠原真子、裊岩晶訳『アートの教育学 革新型社会を拓く学びの技』明石書店、2016 年。